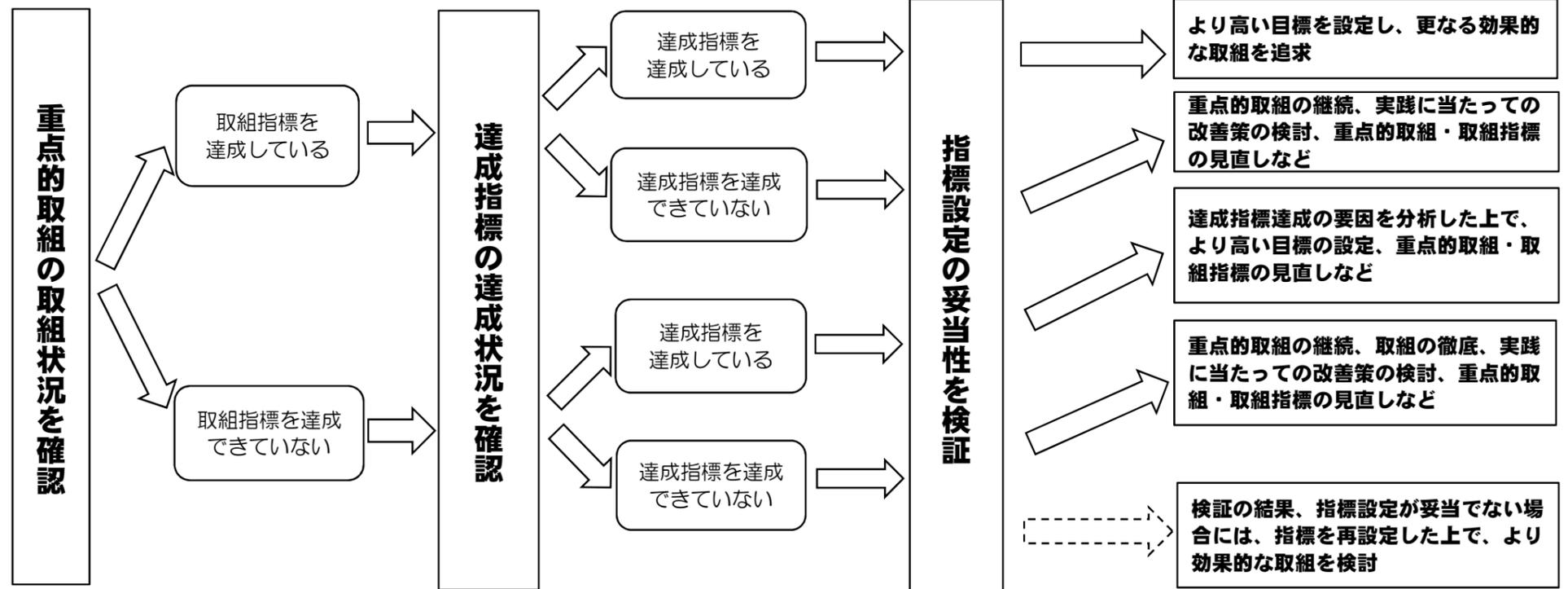


# 検証・改善プロセスのイメージ

## 検証・改善の考え方

### 観点II

客観的なデータを用いて取組指標に基づく取組状況の確認や達成指標に基づく達成状況の確認を行った上で、指標の妥当性を検証しつつ、重点目標達成に近づく改善方を年度の中でも繰り返し検討すること



## 実際の検証・改善例

重点目標	達成指標	重点的取組	取組指標	担当	実施率	取組状況の確認	達成状況の確認	検証	改善策の策定
基礎・基本の定着	○授業の内容がよくわかると肯定的に回答する児童の割合を100%にする。 ○単元まとめテスト60点未満の割合を半減する。	学校	○めあてとまとめが明確にわかる1時間完結型授業の徹底。	○全教職員が学期に3回以上「めあて」と「まとめ」を明示した互見授業を行う。	「学力向上」チーム	70%	<ul style="list-style-type: none"> <li>実施日時を個人ごとに設定させていた。</li> <li>「計画⇒実施」の進行管理が十分ではなかった。</li> </ul>	<b>【指標の妥当性】</b> ・達成指標は昨年度の当該学年の状況などを踏まえると年度末には達成可能であり、妥当と判断。 ・取組指標については、100%実施できていない取組があるが、推進体制を見直すことで実施可能であり、妥当と判断。  <b>【取組状況から】</b> ・互見授業について、「学力向上チーム」が進行管理をきちんと行う必要がある。 ・「家庭」による取組は、「チェックシートによる点検」から全家庭で取り組みやすい内容への変更を検討。 ・学力向上会議の状況を踏まえると、学習サポーターの取組を通して、地域と学校との協働が進みつつある。 ・計画のうち、100%実施できていない取組があるので、全教職員で一丸となって取り組む体制整備が必要。  <b>【達成状況から】</b> ・補充学習の取組は定着してきた。補充学習をより効果的なものとするためには、宿題との連動が必要。	<b>【重点的取組・取組指標の改善】</b> ・互見授業の取組は継続。実施率を100%にするため、「学力向上チーム」が中心となり、互見授業計画表に基づき実施する。授業後には管理職の指導と意見交換会を必ず行う。  ・「朝の補充学習」と宿題との連動を図るため、1週間の宿題計画を作成し、それに基づき補充学習の内容を設定する。  ・「家庭」の取組は、取り組みやすい「家庭学習の声かけ」に変更し、全家庭での実施を目指す。  ・「学習サポーター」の取組は、サポーターとなる人材を増やすため、教職員の地区行事への参加を促し、自治会との連携強化を図る。
		学校	○朝の補充学習の実施。	○週2回（各10分）のドリルタイムを行う。		100%	<ul style="list-style-type: none"> <li>月ごとの教育計画に位置付けて実施した。計画通り100%実施できた。</li> </ul>		
		家庭	○家庭学習の徹底。	○毎日、家庭学習（宿題）チェックシートに記入し、実施状況を点検する。	60%	<ul style="list-style-type: none"> <li>保護者アンケートより6割の実施率。</li> </ul>			
		地域	○学習サポーターの取組の充実。	○年間20回、「学びの教室」学習サポーターとして毎回3人以上参加する。	100%	<ul style="list-style-type: none"> <li>1学期の「学びの教室」実施回数7回。</li> <li>学習サポーターの参加は1回平均3.6人。</li> </ul>			

・低学力層は微減しているものの、重点目標達成に近づいているとは言い難い。